

the funky METERS の日本公演 (09 年 7 月 23 日 SHIBUYA-AX) を録音するという話しが舞い込んだのは 7 月 6 日未明のこと。わたしは Wakarusa (6 月 4-7 日)、Bonnaroo (6 月 11-14 日) から Rothbury (7 月 2-5 日) という恒例のミュージック・フェスティヴァル・ツアーをやっと終えたばかりで、極度の疲労を覚えながらもなかなか治まらない神経と日焼けした肌を鎮めようと必死だった。そこへバンドの招聘元であるスマッシュの K 氏から連絡がきた。なんでも「レコーディングをしたい」というのはバンド側の意向らしい。わたしは、深夜の電話 (わたしはまだ Michigan 州南西部にいた) にもかかわらず大喜びで何度も「(録音を) する、する!!」と興奮気味に答えていた。

funky METERS のライブCD を作れるなんて、こんな光栄なことはない。1990 年代後半 (正確には 1994 年 7 月、25 年目の夏を迎えた Woodstock Music & Arts Festival) 以降、わたしが夢中になっているアメリカのミュージック・フェスティヴァル。その (現在のところ) 頂点にある Bonnaroo Music and Arts Festival の名は Dr. John の名作『Destively Bonnaroo』(74年)から取っている。そのアルバムをバックアップしたバンド、それが METERS だった。バンドは 03 年の Bonnaroo に出演したのみだが、ジャム・バンド・シーンが発端となって生まれたこのフェスティヴァル・ブームで George Porter Jr. はバンドの精神的支柱であり絶対的存在の Art Neville と肩を並べるほどの頭角、(ジャム・バンド・シーンという若年層からの) 再評価を得た。彼は 08 年の Bonnaroo、そして Wakarusa では 08、09 年と連続して Porter-Batiste-Stolts として出演した。白く新芽の香りがするアコースティック・サウンドが中心のフェスティヴァルのなかで彼のプレイは異彩を放ち、神格化さえされるだろうとわたしは近くにいた観客のひとりと話した。きっと彼ら (ミュージック・フェスティヴァルに集まる若年層) にとっては昨年発売された Porter-Batiste-Stolts のライブ・アルバム『MOODOO』に Phish の Page McConnell が参加していたことも George Porter Jr. を支持する要因であったろう。

余談だが、Page は 01 年 (Phish の Hiatus あたり) 前後、頻繁に New Orleans へと出向きバンド・メンバーを探していた。その結果生まれたのが Vida Blue だった。ドラムスは Russell Batiste Jr. ! George Porter Jr. も 00 年にアルバム『Funk' n' Go Nuts』を発表し、精力的に始動しはじめていたところだった (スケジュールさえ言えば、Papa Grows Funk でも有名な New Orleans のバー、the Maple Leaf でプレイしているようだ)。

「わたしは 45 年以上も Art の後を追ってきた」と George Porter Jr. はいっている。そう、考えてみれば今年 (09 年) は、METERS がデビューして 40 周年。バンド側から「ライブ・アルバムを作りたい」というのもよくわかる (まあ、わたしたちにそれだけのものが作れるか、否かは別の話として)。

アルバム・デビューからは 40 年。結成してからは 42 年目 (43 年ともいわれている)。ネイティヴ・ニューオーリンズばかりで結成されたメンバーは Art、George の他に Leo Nocentelli (ギター)、Ziggy Modeliste (ドラムス) であった。当時、Art はすでに 30 歳で George は 20 歳。他のメンバーも 10 代後半であった。うーん、このあたりに Art の親分肌的なところがうかがえる、というか、若造をこき使う感じがしないでもないが…しかし Art はハイスクール時代からニューオーリ

ンズのコミュニティでは有名で the Hawkettes 時代には「Mardi Gras Mambo」などのシングル・ヒットも持っていた。66 年には METERS の前身である the Sounds を結成。Aaron と Chaeles Neville がヴォーカリストとして参加していた。the Sounds はクラブなどでセッションを繰り返し、Allan Toussaint の目にとまった。Allan と Marshall Sehorn が経営する Sansu Enterprises とバンドは契約するが、その条件は「ヴォーカリスト抜き」というもの。

バンドは METERS と名を変え、Lee Dorsey や Earl King らのバックを務め (下積み?)、しかしすぐに「Cissy Strut」などのダンス・ナンバーをヒット・チャートへ送り込んだ。

デビュー・アルバム『the METERS』(69 年) から翌年『Look-ka Py Py』、『Struttin'』を Josie Label から発表したバンドは、Warner /Reprise と契約。『Cabbage Alley』(72 年)、『Rejuvenation』(74 年)、『Fire on the Bayou』(75 年)、『Trick Bag』(76 年) を発表。この間に the Rolling Stones とのツアーやヒット曲にも恵まれたが『New Directions』(77 年) を最後に解散。Art は Cyrill (75 年に加入) とともに Neville Brothers として再始動した。

METERS が再結成したのは 89 年の New Orleans Jazz and Heritage Festival で。ドラマーは Ziggy Modeliste から Russell Batiste Jr. へ替わっていた。翌年には Josie 時代の音源から『Good Old Funky Music』が、92 年には「寄せ集め」と評価の低い『the Meters Jam』(共に Runder)、75 年のライブ音源から『Uptown Rulers: the Meters live on the Queen Mary』(Rhino) からリリース。94 年にも『Fundamentally Funky』(Charly UK-編集もの) が発売されるが、Leo Nocentelli が脱退。替わりにバンドの旧友である Brian Stoltz が加入した。そしてバンド名を「funky METERS」とし Original Meters と区別するようになった。Brian Stoltz がバンドでプレイしたのは 07 年 3 月までで、以降は Art の息子 lan がギタリストとして加わっているが・・・03 年に発表された the funky METERS としてはじめてのアルバム『Fiyo at the Fillmore,vol1』にも Brian Stoltz と lan の両名がクレジットされている。同作は 01 年 3 月におけるライブである。

Rothbury から帰国してすぐに the funky METERS 側へカヴァー・デザイン案を送った。しかし、なかなか返事はこなかった。7 月第 3 週にやっとマネジャーから「カヴァーはオーケー」との連絡がきた。それでもまだ正式にレコーディングをやるのか、やらないのか、条件面での回答はなかった。「やっぱりダメかあ」とため息をついていた公演 3 日前に「今から日本へ向かう。録音は、やるよ」とあまりにもシンプルなメールがマネジャーから送られてきた。

当初は公演終了直後にライブCD-R を販売する予定だったが、先のような事情からアルバム・カヴァーや盤面などのプリントが間に合わなかった・・・まあ、おかげでサウンド・チェックから本編へ、ゆっくりとバンドの演奏を楽しむことができたのだが。

サウンド・チェックには Art はこなかった。他のジャム・バンド同様、サウンド・チェック時は (Porter-Batiste-lan で) インプロビゼーションの練習。このとき彼らは Neil Young の「Down by the River」をやっていた。で、本編では「Love the One You With」。10 年ほど前にバンドが「For What It's Worth」をプレイするのを聞いたことがあるが、ジャムを基盤とするバンドはこのように音楽の垣根を越えた部分がある。わたしは彼らのそういったところが大好きなのだ。そして年配のミュ

ージャンが若いプレイヤーを育て上げているところにも魅力を感じている。

サウンド・チェック時にはインプロビゼーションの練習、と書いたが、そのときは明らかに George Porter Jr. が lan を鍛え上げていた。本編では最後の「Ant No Use」のときがそうだった。ふたりはずっと向かい合ってそれぞれの楽器をかき鳴らした。George Porter Jr. が力強いフレーズで迫っても lan は思い切りよくギターで応えることができなかった。George Porter Jr. はくどいほど lan に迫り、ギターを弾かせた。まるで長屋に住んでいるオヤジが近所の悪ガキを叱りつけているような、どこか懐かしく心温まる光景だ。そういえば山岸潤史も若いメンバー (Papa Grows Funk) を前へ押し出す役目をしてしていると話していたことがあった。8 月に入ってから観た the New Birth Brass Band にもそんな感じがした。New Orleans のシーンではそのようなミュージシャン同士の縦社会がまだ存在しているのだろうか? 日本のポップなシーンではまず観ること、感じるこののではない「瞬間」であるように思うが・・・。もしかすると Brian Stoltz から lan に替わったのも血縁関係以外に、彼を一人前にするという理由があったのかもしれない。

実はライブ当日、わたしは lan に多少の物足りなさを感じていた。もっと大きな音を出せばいいのに、と思った。(オヤジ臭いけど) 最近の若いギタリストはメチャクチャにギターを弾かない。ギターはうまくても。lan にもそんな印象を持ったが、録音したもの (本作) を聴き返してみると lan はシャレたフレーズを弾いている。血は争えない・・・か。カッティングも、わたしの知る限り、New Orleans では山岸潤史に迫る勢いだ。フジ・ロック・フェスで the funky METERS を観た友人は「意外と lan がよかった」といっていた。バンドは lan の成長で第 3 期へと突入したのだろうか。

北村和哉 (Hoy-Hoy Records)